セシウム

不検出がれきに限定

松阪 山中市長、シンポで説明

震災がれきシンポで話す山中市長（右端）＝松阪市本町の市産業振興センターで

【松阪】松阪市は二十七日夜、同市本町の市産業振興センターで「東日本大震災のがれき処理のあり方を考えるシンポジウム」を開いた。山中光茂市長は、受け入れ条件として放射性セシウムが不検出のがれきに限ることを、繰り返し説明した。

「受け入れありき」ではなく、現段階の情報を市民と共有し、議論するのが狙い。市内から百五十人、市外から五十五人（同市発表）が参加した。シンポにはパネリストとして環境省や県の担当者、被災地の陸前高田市、久慈市の担当職員、専門家が出席。現状や取り組みを報告した。

山中市長は、がれきの放射性セシウムが国の基準より厳しい一キロ当たり一〇〇ベクレル以下、焼却灰の埋め立て処分時二〇〇〇ベクレル以下とする県の基準に対し、「十分で、問題ないと考えているが、市としては不検出を条件にする。入り口（受け入れ時）も出口（埋め立て時）も不検出とし、安全性を担保する」と説明した。

陸前高田市、久慈市の担当者はがれき処理の現状を話し、がれきが復興計画の妨げになっていると話し、広域処理に理解を求めた。

会場からは放射性物質に対する健康への心配や広域処理への疑問、松阪肉などに対する風評被害の問題などの意見が出された。市長は今後も市民と話し合う場を設け説明責任を果たしていくとした。

終了後、市長は取材に応じ、広域処理について「最低限の理解を得られた。不検出基準についてはさらに説明していきたい」と話した。三千人規模の市民アンケートの実施、子どもを対象にした議論の場もつくる考えを示した。

同シンポは同市桂瀬の市多目的研修施設でもあり、市内九十四人、市外十三人の合わせて百七人が参加した。

（山下二三男）

平成24年6月29日
伊勢新聞